HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	定型節から目的語への繰り上げと位相理論
Author(s)	大野, 公裕
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 54, 35-46
Issue Date	2008-03-17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34567
Type	departmental bulletin paper
File Information	OONO.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

定形節からの目的語への繰り上げと位相理論

大　野　公　裕

1．はじめに

本稿では、(1a)のような日本語における目的語への繰り上げ構文を取り上げ、その構造を明らかにすることを試みる。特に、対格名詞句の格がどのように決定されるかを理論的および経験的に考察することによって、対格名詞句は対応する(1b)の主語「花子が」とは異なり、埋め込み節の「話題（Topic)」として基底生成されるということを主張する。

(1)　a．太郎は花子をばかだと思っている。
　　b．太郎は花子がばかだと思っている。

目的語への繰り上げ構文における対格名詞句がどの位置に基底生成されるかに関しては、主節の動詞句内に生成されるという分析もある。しかし、2節では、対格名詞句が主節内ではなく、従属節内に基底生成されることを示す証拠を見る。その上で、3節では、Chomsky(2005, 2007）などにおけるミニマリスト・プログラムの位相（phase）理論の観点から対格名詞句の格査定(Case valuation)の問題を考察する。そして、対格名詞句は、以下の(2)におけるように、埋め込み節の「話題」として生成され、この位置で主節の動詞から対格として査定され、TP内の対応する（ゼロ）代名詞を束縛しているという分析を提案する。4節は結論である。

(2)　太郎は［$_{CP}$［$_{TopP}$ 花子を$_{i}$［$_{TP}$ pro$_{i}$ ばかだ]] と］思っている。

2．埋め込み節からの繰り上げ

Kuno(1976)は以下の(3)における対比を指摘し、繰り上げ構文における対格名詞句が主節内にあることを示した。

(3)　a．　太郎は花子を愚かにも［天才だと］思った。
　　b．* 太郎は［花子が愚かにも天才だと］思った。

(3)における「愚かにも」という主語指向の副詞は、主節の主語「太郎」と結びつくためには、(3b)の非文法性からも示されるように、主節になければならない。そうすると、(3a)ではその前に生じている対格名詞句「花子を」も主節内にあることになる。しかし、この対比からは、対格名詞句が埋め込み節から繰り上がったかどうかはわからない。対格名詞句が最初から主節内に生成されている可能性があるからである。

実際、そのような分析がこれまでしばしば提案されてきた(Saito 1985、Hoji 1991、Takano 2003などを参照)。しかし、対格名詞句が埋め込み節内で基底生成されていることを示す証拠が存在する。まず、以下の(4b)は(4a)における補文の CP をスクランブリングによって文頭に前置したものだが、容認可能性は低い。Tanaka (2002) および Hiraiwa (2005) は、(4b)の非文法性は CP 内に残した対格名詞句の痕跡による適正束縛条件 (Proper Binding Condition) の違反として説明できると主張する。この説明が正しいとすると、(4b)は対格名詞句が埋め込み節内で基底生成され、そこから繰り上がっていることを示す証拠になる。

(4)　a．　太郎は［花子を$_i$］(愚かにも)［$_{CP}$［t_i］天才だと］思った。
　　b．?*［$_{CP}$［t_i］天才だと］太郎は［花子を$_i$］(愚かにも)［$_{CP}$ t］思った。

また、「そう」という「文代用形 (sentential pro-form)」を使ったテストでも同様のことが示される。以下の(5a)では、「そう」が最初の文の埋め込み節 CP の代用形になっているが、(5b, c)は容認度が落ちる。ここでは、「そう」代用形に関しては、最初からこの形で併合 (Merge) され、意味部門で CP の代用形として解釈されると仮定しよう。そうすると、もし対格名詞句が主節内に基底生成されるのであれば、(5b, c)の場合も「そう」が前半の文の CP を代用できるはずである。一方、対格名詞句は CP 補文内で基底生成されるとするなら、この対比は説明できる。なぜなら、(5b, c)の後半の文における対格名詞句の出所がないからである。[1]

(5)　a．　太郎は［$_{CP}$ 花子が天才だと］思った。そして次郎もそう思った。
　　b．?* 太郎は花子を［$_{CP}$ 天才だと］思った。そして次郎も花子をそう思った。
　　c．?* 太郎は花子を［$_{CP}$ 天才だと］思ったが、次郎は明子をそう思った。

1　以下が文法的であることから、「どう」は「そう」とは異なり、副詞として機能し、それに対応してこの場合の「思う」は目的語に意味役割を与えていると考えられる。

(i)　太郎は花子をどう思ったの？

「そう」代用形はCPの左方転位（Left Dislocation）においても同様の文法性の対比を示す。(6a)では「そう」が左方転位したCPの代用形として解釈されるのに対して、(6b-d)は不適格である。左方転位したCPに関しては、移動したのではなく、文頭に基底生成されると仮定しよう。そうすると、(6b-d)が不適格であるのは、(5)の場合と同じように対格名詞句の出所がないことが原因であると考えることができる。

(6) a． [$_{CP}$ 花子がかわいそうだと]、太郎はそう思った。
b． * [$_{CP}$ かわいそうだと]、太郎は花子をそう思った。
c． ?* [$_{CP}$ かわいそうだと]、太郎はそう花子を思った。
d． ?* [$_{CP}$ かわいそうだと]、そう太郎は花子を思った。

さらに、Hiraiwa (2005) は以下の(7)の例をあげ、繰り上げ構文の対格名詞句が埋めこみ節内にあることを示した。Hiraiwaは日本語の「誰」や「何」などの不定代名詞が「も」と結びつくことによって否定対極表現（Negative Polarity Item, NPI）として解釈されるのは、「も」が（「転送（Transfer）」の時点で）不定代名詞をc統御している場合であると論じている（異なる提案としてはKishimoto 2001を参照）。この仮定が正しいとすると、以下の(7a)では、TPの主語である「誰が」は補文標識「と」に付加した「も」のc統御領域内にあるのでNPIとして認可されるが、(7c)では「誰に」は明らかに「も」のc統御領域内にないのでNPIとして認可されない。そして、問題の(7b)で「誰を」がNPIとして認可されるということは、対格名詞句の「誰を」が「も」のc統御領域内にある、すなわちCP補文内にあるということを示している（Sakai 1998も同様の主張をしている）。

(7) a． 太郎は［誰がばかだと-も］思わなかった。
b． 太郎は［誰をばかだと-も］思わなかった。
c． ?* 太郎は誰に［PRO ボストンに行くこと-も］勧めなかった。

以上、目的語への繰り上げ構文における対格名詞句は埋め込み節内で基底生成されると考えられる証拠を見た。特に、最後の不定代名詞の例は、主節への繰り上げは随意的である、すなわち、対格名詞句は埋め込み節内に留まることができるということを示している。次節では、対格名詞句が正確にどの位置に生成されるかを詳しく考察することにしよう。

3．格査定と位相理論

前節では、目的語への繰り上げ構文における対格名詞句が埋め込み節内に留まることができ

るという証拠を見た。(7b)の例（(8)として再掲）をもう一度考えてみよう。

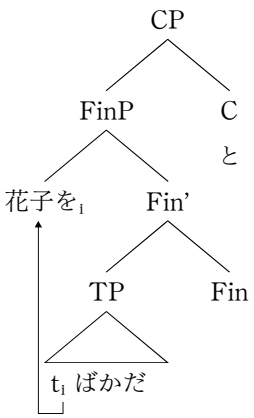
(8)　太郎は［誰をばかだと-も］思わなかった。（＝(7b)）

埋め込み節における対格名詞句「誰を」の位置は、NPIの認可条件から補文標識「と（も）」のc統御領域内であるとすると、Tの指定部と考えられそうである。つまり、(9)のように、対格名詞句は(7a)などの通常の主格主語と同じ位置を占めているという考えである。

(9)　太郎は［$_{CP}$［$_{TP}$ 誰をばかだ］と-も］思わなかった。

しかし、この考えは理論的な問題を引き起こす。ミニマリスト・プログラムの仮定(Chomsky 2005、2007など）の下では、Tの指定部の位置にある名詞句は上の節の要素から格査定などの一致操作（Agree）を受けることができない。CPが位相であるため、その主要部Cの補部であるTPがCPの構築が終わった段階で音韻部門と意味部門に転送されるので、上の探査子（probe）が対格名詞句にアクセスすることができないからである。そこで、Hiraiwa (2005)はこの問題を回避するために、Rizzi (1997)の階層的CP構造を採用し、以下の(10)のように、対格名詞句はCPとTPの間にある機能範疇Fin（＝Finiteness）の指定部に繰り上がると仮定している。

(10)　太郎は［$_{CP}$［$_{FinP}$ 花子を$_i$［$_{TP}$［t_i］ばかだ]]と］思っている。



この構造では、対格名詞句はFinの指定部へ繰り上がった後、TPが転送され、その後、上の節が構築され、次の探査子 v*-Vによって対格として査定される。ここで、FinPは位相だが、CPは位相ではないことに注意されたい。

しかし、この派生は理論的にも経験的にも問題がある。まず最初の理論的な問題は、TP における対格名詞句のA連鎖（A-chain）が格査定をされないまま転送されるため、解釈不可能な未査定の格素性が派生を破綻させることである。一般に、格や一致（agreement）の解釈不可能な素性は転送される前にすべて査定されていなければならない。

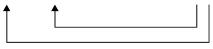
二つ目の理論的な問題は、対格名詞句が TP 内で主格として査定されないのはなぜかという問題である。繰り上げ構文における埋め込み節内のTは、通常の定形節におけるTと同様に、主格を査定するという証拠がある。以下の(11a)の埋め込み節は、多重主語を持ち、最初の主語「花子を」は対格、二番目の主語「目が」は主格として査定されている。この二番目の主語の主格が述語「きれい」によってではなく、定形の時制によって査定されていることは(11b)からわかる。この例が非文法的なのは、埋め込み節がいわゆる小節であり、定形の時制を持たないため、二番目の主語「目が」の主格が査定されないからであると考えられる。

(11) a． 太郎は［花子を目がきれいだと］思った。
b．* その美容外科医は［花子を目がきれいに］した。

そうすると、(10)で「花子を」は TP（実際は VP）内にある時点で主格を査定されるので、いわゆる定形節からの目的語への繰り上げ構文というのは存在し得ないことになる。

ここで、主格の査定は随意的であると仮定しても、問題が生じる。一つは、一致操作は一般に、探査子と一致する名詞句はすべて同時に一致すると仮定されているからである（「多重一致（Multiple Agree）」）。(11a)は、埋め込み節内でTとの一致が起きる時点では、(12)のように両方の名詞句は主格として査定されるか、あるいは格査定が随意的であるとの仮定の下では、両方とも査定されないかのどちらかである。いずれにしても、(11a)の格配列は生じ得ない。

(12) 多重一致
…［$_{TP}$［花子が目がきれい］［$_{T}$だ］］…



また、主格の査定が随意的であるという仮定は、従来からしばしば指摘されているように、以下のような与格主語構文の格配列を説明する際に問題となる。以下の(13d)が非文法的なのは、この文において主格が現れていないからであるという説明が一般的である（柴谷1978、竹沢1998参照）。つまり、日本語においては、Tによる主格の査定は義務的であると考えられる。

(13) a． 太郎がその歌を歌えない（こと）
b． 太郎がその歌が歌えない（こと）
c． 太郎にその歌が歌えない（こと）
d．* 太郎にその歌を歌えない（こと）

次に、(10)の派生の経験的問題に移ろう。上記二つの問題点は、対格名詞句が TP 内から移動したのではなく、最初から TP の外に生成され、TP 内には対応するゼロ代名詞が存在し、これが主格を受けているのではないかということを強く示唆する。実際、この予想が正しいことを示す経験的証拠がある。ある統語的依存関係が移動によるものかどうかの判定基準の一つに再構築（reconstruction）効果の有無があるが、目的語への繰り上げ構文の場合、対格名詞句は対応する主格名詞句とは異なり、再構築効果を示さない。[2] このことは、対格名詞句が移動していないという可能性を示唆する。再構築は主に束縛とスコープに関して見られるが、まず、数量詞のスコープの相互作用から見ていこう。

以下の(14a)は埋め込み節内の主格名詞句と与格名詞句の相対的スコープに関して両義性を示す。つまり、「誰か」と「どの仕事」のどちらも広いスコープをとることができる。これはおそらく「向いている」という述語が非対格動詞のためであると考えられる。一般に、非対格動詞の二つの項は相対的スコープに関して両義性を示すことが知られている。[3] しかし、繰り上げ構文の(14b)ではこの両義性が見られず、「誰か」が広い読みしかない。もし(14b)において、対格名詞句が埋め込み節の動詞句内から繰り上がったのであれば、再構築効果によって(14a)と同じスコープの両義性が見られるはずである。(14b)にこの両義性がないということは、対格名詞句は TP 内から移動したのではないということを示している。

(14) a．太郎は［誰かがどの仕事にも向いていると］思った。
（√誰か＞どの仕事、√どの仕事＞誰か）
b．太郎は［誰かをどの仕事にも向いていると］思った。
（√誰か＞どの仕事、*どの仕事＞誰か）

2 Takano（2003）も Oka（1988）による数量詞のスコープと束縛変項のデータをあげて、同様の指摘をしている。

3 例えば、以下のいずれの例においても、二つの項の相対的スコープに関して両義性が見られる。

(i) a．誰かがどの部屋にも入った。
（√誰か＞どの部屋、√どの部屋＞誰か）
b．一つの部屋に誰もが入った。
（√一つの部屋＞誰も、√誰も＞一つの部屋）

束縛の再構築に関しても、同じ結果が得られる。一つは照応形「自分」の束縛であるが、以下の(15a)、(16a)の埋め込み節では、与格主語「花子に」が主格名詞句の再構築効果によって「自分」の先行詞となる読みが可能である。[4] それに対して、(15b)、(16b)では、「花子に」が「自分」の先行詞となる読みは不可能である。(15b)、(16b)における対格名詞句が埋め込み節の動詞句内から移動したのであれば、(15a)、(16a)の場合と同じように、再構築効果を示すはずである。

(15) a. 太郎は［[自分$_i$の母親の服が］花子$_i$に［t］似合うと］思った。
b. * 太郎は［[自分$_i$の母親の服を］花子$_i$に pro 似合うと］思った。
(16) a. 太郎は［[自分$_i$の母親が］花子$_i$に（は）［t］苦手だと］感じた。
b. * 太郎は［[自分$_i$の母親を］花子$_i$に（は）pro 苦手だと］感じた。

変項束縛の場合も同様である。以下の(17a)、(18a)の埋め込み節では、主格名詞句の再構築効果によって与格主語が代名詞(pro、「そいつ」)を束縛する解釈が可能であるが、それに対して、(17b)、(18b)では、代名詞の束縛変項としての解釈は不可能である。

(17) a. 太郎は［[pro$_i$今着ている服が］どの人$_i$にも［t］似合っていると］思った。
b. ?* 太郎は［[pro$_i$今着ている服を］どの人$_i$にも pro 似合っていると］思った。
(18) a. 太郎は［[そいつ$_i$の母親が］どの学生$_i$にも［t］苦手だと］感じた。
b. ?* 太郎は［[そいつ$_i$の母親を］どの学生$_i$にも pro 苦手だと］感じた。

これらの束縛の事実もやはり、繰り上げ構文における対格名詞句は TP 内から移動したのではなく、TP の外に基底生成され、TP 内には対応するゼロ代名詞 pro が存在しているということを示唆する。

以上、Hiraiwa (2005) が提案する (10) の派生に関して、理論的および経験的問題をいくつか見てきたが、これらすべての問題が示しているのは、定形節からの目的語への繰り上げ構文においては、対格名詞句は埋め込み節の TP より上の位置に基底生成されているということである。そして、一方では、(8) の不定代名詞の束縛の例から、対格名詞句は補文標識 C の c 統御領域内になければならない。そうすると、対格名詞句は CP と TP の間にある何らかの（おそらく機能範疇の）投射の指定部に基底生成されていることになる。以下では、Rizzi（1997）の階層的 C システムの観点から対格名詞句の構造上の位置を探ってみよう。

日本語では、以下の(19)ように、補文標識の「と」は疑問節を埋め込むことができる。しか

4 この場合「太郎」を先行詞とする解釈のほうがより自然だが、ここでの議論には関係しない。

し、(20a, b)の対比が示すように、繰り上げ構文における対格名詞句が wh 句の場合は完全に容認不可能になることが Ueda（1988）によって指摘されている。

(19)　太郎は［誰がその本を借りたかと］思った。
(20)　a．　太郎は［誰が犯人かと］思った。
　　b．＊太郎は［誰を犯人かと］思った。

しかし、繰り上げ構文が疑問節を埋め込むことができないというわけではない。以下の(21)－(22)における a と b の対比からわかるように、wh 句が対格名詞句の場合は容認不可能であるが、それ以外の要素であれば、ほぼ容認可能である。

(21)　a．＊太郎は［誰を数学が得意かと］思った。
　　b．　太郎は［花子を何が得意かと］思った。
(22)　a．＊太郎は［誰を花子の恋人かと］思った。
　　b．　太郎は［花子を誰の恋人かと］思った。

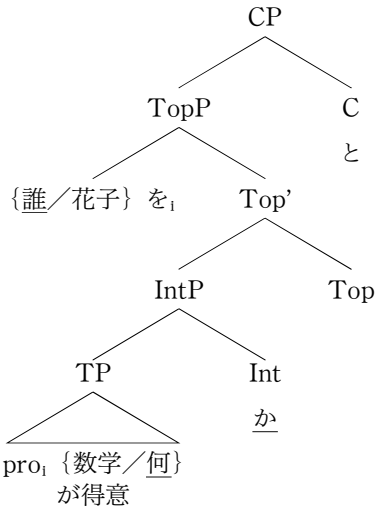
Rizzi (1997, 1999) は、従来の CP―TP システムは(23)のような一連の機能範疇から成り立っていると主張する。ここで、Force は従来の補文標識C、Top(ic) は話題、Int(errogative) は疑問節を導く主要部、Foc(us) は焦点、Fin(iteness) は定形または非定形の時制である。Top は繰り返し現れることができ、Force と Fin の間にある機能範疇 Top、Int、Foc は随意的である。以下では、Force をC、Fin―IP を TP として表すことにする。

(23)　Force　Top*　Int　Top*　Foc　Top*　Fin　IP

そうすると、(21)－(22)における対比は、以下のように説明できる。すなわち、日本語では、C（＝Force）は「と」、Int は「か」として具現し、繰り上げ構文における対格名詞句は両者の間に現れる Top の指定部に基底生成されると仮定できる。そうすると、例えば(21)の構造は(24)－(25)のようになり、対格名詞句は「か」の c 統御領域外にあることになるので、対格名詞句が wh 句である(24a)は、wh 句の認可条件が満たされず、非文法的となる。一方、(24b)では、wh 句は TP 内にあるので、「か」に c 統御され、認可条件を満たす。

(24)　a．＊太郎は［$_{CP}$［$_{TopP}$ 誰を$_{i}$［$_{IntP}$［$_{TP}$ pro$_{i}$ 数学が得意］か］Top］と］思った。
　　b．　太郎は［$_{CP}$［$_{TopP}$ 花子を$_{i}$［$_{IntP}$［$_{TP}$ pro$_{i}$ 何が得意］か］Top］と］思った。

(25)



このように、Rizzi の階層的 CP 構造を仮定すると、繰り上げ構文における対格目的語は節の左端領域 (left periphery) における一番上の Top の指定部に基底生成されると考えることができる。ここで Hiraiwa (2005) が提案する構造(10)と比較すると、両者は対格目的語が CP と TP の間の機能範疇の指定部にあるという点で同一だが、ここでの提案は上で指摘した(10)の派生に関する理論的問題を生じない。まず、対格目的語は TP 内から移動したのではなく、対応するA位置にはゼロ代名詞があり、これが主格を査定されるので、Tによる主格の査定が日本語では義務的であるという仮定を保持できる。また、位相に関しては次のように考えることができる。「位相不可侵条件 (Phase Impenetrability Condition)」によると、転送の際には位相の主要部Hの補部がインターフェースに送り込まれ、Hとその指定部は次の上の位相での操作を受けられる。従来 CP は位相と考えられてきたが、Chomsky (2000) 以降で指摘されているように、いわゆる従来のCは TP より上の左端領域における機能範疇すべてを一まとめにして指す用語であるとすると、(23)の一連の機能範疇のうち、転送の際にインターフェースに送り込まれるのは TP だけであり、それより上にある主要部と指定部はすべて次の位相での操作を受けられると考えるのは自然である。このように仮定すると、繰り上げ構文においては、埋め込み節の TP の転送の際には pro の格はすでに査定され終わっているので、(10)の派生に関して指摘した未査定の格素性の問題は生じない。そして、Top の指定部にある対格名詞句は上の節の探査子 v^*-V によって正しく対格として査定される。

本節では、日本語の目的語への繰り上げ構文に関して、Hiraiwa (2005) の分析を出発点としながら、そこにおける理論的問題を回避できる新たな分析を提案した。

4．結論

本稿では、日本語におけるいわゆる「目的語への繰り上げ構文」を取り上げ、対格目的語は埋め込み節の「話題」として基底生成されるという分析を提案した。位相理論の観点から対格目的語の格査定の問題を考察すると、対格目的語が TP の外に基底生成されていることが示唆されるが、実際にその経験的証拠があることを見た。そして、対格目的語のより正確な構造上の位置に関しては、Rizzi の提案する左端領域中、一番上の Top の指定部であると考えられる証拠を見た。

本稿での提案が正しければ、定形節からの繰り上げと考えられてきた構文は、正確には定形時制の領域（すなわち TP）外からの（随意的）繰り上げであることになる。そうだとすると、定形節を越えるA移動は、従来「非適正移動（improper movement）」として不可能とされてきたが、日本語における「目的語への繰り上げ構文」はこれには当たらないことになり、新たな問題を生じることもない。

本稿では取り上げなかったが、対格名詞句の意味役割や再出代名詞（resumptive pronoun）の生起などに関しても、特に問題なく本分析に取り込むことができると思われる。

参考文献

Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries: The framework. In *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89–155. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, Noam. 2005. On phases. Ms., MIT, Cambridge, Mass.

Chomsky, Noam. 2007. Approaching UG from below. In *Interfaces＋recursion＝language?: Chomsky's minimalism and the view from syntax-semantics*, ed. by Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner, 1–29. Berlin: Mouton de Gruyter.

Hiraiwa, Ken. 2005. Indeterminate-Agreement: Some consequences for the Case system. In *Minimalist approaches to clause structure*, ed. by Ken Hiraiwa and Joseph Sabbagh, 93–128. MIT Working Papers in Linguistics 50. Cambridge, Mass.: MIT, Department of Linguistics and Philosophy, MITWPL.

Hoji, Hajime. 1991. Raising-to-object, ECM, and the major object in Japanese. Paper presented at Japanese Syntax Workshop at University of Rochester.

Kishimoto, Hideki. 2001. Binding of indeterminate pronouns and clause structure in Japanese. *Linguistic Inquiry* 32: 597–633.

Kuno, Susumu. 1976. Subject raising. In *Syntax and semantics 5: Japanese generative grammar*, ed. by Masayoshi Shibatani, 17–49. New York: Academic Press.

Oka, Toshifusa. 1988. Abstract Case and empty pronouns. In *Tsukuba English Studies* 7, 187–227.

Rizzi, Luigi. 1997. The fine structure of the left periphery. In *Elements of grammar: Handbook of generative syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 281–337. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

Rizzi, Luigi. 1999. On the position "Int(errogative)" in the left periphery of the clause. Ms., Università di Siena.

Saito, Mamoru. 1985. Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.

Sakai, Hiromu. 1998. Raising asymmetry and improper movement. In *Japanese/Korean Linguistics* 7, 481–

497. Stanford, CA.: CSLI.
柴谷方良. 1978.『日本語の分析』大修館書店.
Takano, Yuji. 2003. Nominative objects in Japanese complex predicate constructions: A prolepsis analysis. *Natural Language & Linguistic Theory* 21: 779–834.
竹沢幸一. 1998.「格の役割と構造」竹沢幸一・John Whitman 著『格と語順と統語構造』1–102. 研究社.
Tanaka, Hidekazu. 2002. Raising to object out of CP. *Linguistic Inquiry* 33: 637–652.
Ueda, Masanobu. 1988. Exceptional Case-marking in Japanese. In *Sophia Linguistica* 23/24, 39–46. Tokyo: Sophia University.

《SUMMARY》

Raising to Object out of Finite Clauses and the Phase Theory

Kimihiro OHNO

In this article, I examine the structure of the so-called Raising to Object construction in Japanese exemplified in (1), and claim that the accusative NP is base-generated in the Spec of Topic in the embedded clause and assigned its Case from the matrix verb.

(1) Taroo-wa Hanako-o baka da to omotteiru.
Taroo-NOM Hanako-ACC stupid COP COMP think
'Taroo considers Hanako to be stupid.'

Hiraiwa (2005) has shown that the accusative NP in (1) can stay in the embedded clause, more specifically, in the c-command domain of the embedded C. Starting from this observation, I explore where the accusative NP is base-generated in the embedded clause. Within the minimalist framework proposed in Chomsky's recent works, I consider Case valuation of the accusative NP in the phase theory and point out a number of theoretical problems with Hiraiwa's assumption that the accusative NP is base-generated within the embedded TP and then moves to some higher position between TP and CP. These problems suggest that the accusative NP is base-generated above the embedded TP, its Case being valued by the matrix verb. Next, I present some empirical evidence that this conjecture is in fact true: the lack of reconstruction effects of the accusative NP. Finally, I adopt Rizzi's fine structure of the C system and give evidence that the accusative NP is base-generated in the Spec of the topmost Topic in the left periphery of the embedded clause.